SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ブラジル人幼児2名による「Vてしまう」構造習得に関する事例研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008115

ブラジル人幼児２名による「Ｖてしまう」構造習得に関する事例研究

久　野　美津子

【要　旨】

ブラジル人幼児２名の発話データを基に「Ｖてしまう」構造について使用状況を調査した。その結果、主に次の特徴が見られた。（a）縮約形「ちゃう／ちゃった」のみが用いられ「てしまう／てしまった」は1度も観察されなかった。（b）形式の初出順序は「Ｖちゃった」→「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」→「Ｖちゃって」であった。各形式がまだ使えない時期には「Ｖちゃう」を「Ｖちゃった」としたり、「Ｖちゃってない」を「Ｖちゃない」としたりする誤りも見られた。（c）「Ｖてしまう」構造内では動詞「落ちる」「行く」「食べる」「なる」等が多用された。（d）ある動詞が、異なる意味としても用いられ、特に「落ちる」は様々な場面で用いられた。（e）構造内の動詞に関して、活用形や発音が不完全なものも観察された。以上の特徴はL1幼児にも共通して見られた。一方、先行研究で報告されているような、構造内で動詞以外の品詞を用いる等の誤りは、本調査では観察されなかった。

【キーワード】第二言語習得、ブラジル人幼児、「Ｖてしまう」構造、「Ｖちゃった」、「Ｖちゃう」

１．はじめに

本稿はブラジル人幼児２名による第二言語（L2）としての「動詞テ形（Ｖて）＋しまう」構造習得に関する事例研究である。「Ｖてしまう」構造は初級の文法項目であるが、その意味用法は「完了」「後悔」「感慨」「不都合・反期待」など多岐にわたっており（吉川1982、小泉他1989、石沢・豊田1998、砂川1998、友松他2000）、学習者にとって習得が容易ではない項目であろうと予想される。実際、筆者は教育現場で、「Ｖてしまう」を必要としない場面で同構造が用いられたり、不適格に用いられたりする例（例：*楽しいちゃった[(1)]）を耳にしたことがある。さらに、縮約形「ちゃった（／じゃった）」「ちゃう（／じゃう）」は教室で文法を学んだ学習者には聞き慣れない表現らしく、難しいという声が多く聞かれた。

このような経験から、L2学習者が明示的にではなく自然習得環境で日本語を学習した場合、どのように同構造を習得していくのか、非常に興味を持った。明示的に学ぶ場合は、まず動詞のテ形を学習し、その後、ある特定の意味を持つ補助動詞として「しまう」「しまった」を付加させる。自然習得環境で学ぶ学習者の場合も、まずテ形が言えるようになってから同構造を発話するようになるのか、また、同構造を不自然な状況や場面で用いることはないのかなど、様々な疑問が浮かぶ。そこで、本稿では、日本語を自然習得環境で学んだL2幼児の発話データを基に、同構造の使用状況を記し、習得の特徴を明らかにしたいと考える。予備調査として、日本語を母語（L1）とする幼児の発話データを用いて、同構

造の習得初期の使用状況も調査し、特徴を記す。

２．L2先行研究

橋本（2006）はL2幼児の動詞形の習得過程解明を目的に、「た」形（～た、～だった、～ちゃった）に焦点を当て、縦断的研究を行っている。対象児は英語をL1とする英国人女児１名（調査開始時年齢：3歳6ヶ月）であり、幼稚園入園後6ヶ月目（入園時期：4月11日、調査開始時期：9月29日）から11ヶ月間に得られた自然発話データが使用されている。

調査の結果、「ちゃった」に関しては、（入園後）8ヶ月目に初めて発話が観察され、その際、発話回数が多く、不適格構造も多かったという。このことから、「ちゃった」は固まりで記憶されている可能性が高いと述べている。不適格構造の出現時期は8～10ヶ月目および13～14ヶ月目であり、動詞以外の品詞を用いた例（例：catちゃった、小さいーちゃった）や、動詞の活用が不適格な例（例：できるちゃった）などが報告されている。特に、8ヶ月目には名詞を用いた例が多かったという。また、意味に関して、「ちゃった」は8～11ヶ月目に「現在のこと」（例：「キティちゃんだよ」の意味で「キティちゃんちゃった」と言う）や、「結果の状態」（例：「plaster貼ってるの」の意味で「プラスタちゃった」と言う）などとしても用いられていたと述べている。

このように、橋本（2006）は「ちゃった」に関するいくつかの結果を報告し、スキーマという概念を用いて習得段階も示している[(2)]。ただし、これは「ちゃった」に限定されたものであり、「～ちゃう」「～ちゃおう」などは含まれていない。さらに、データ収集の開始時期が入園後6ヶ月目であるため、入園直後から5ヶ月目までの初期の使用状況は明らかではない。また、データ分析では、「スロット＋ちゃった」という枠組みを用いて、「スロット」に入る形態を「動詞語幹」「動詞」「形容詞」「名詞」「φ」「文」「副詞」などに分類し、使用状況を時期別に記している。しかし、その際、発話データ全てを分析対象としたわけではなく、「スロットへの挿入操作を行っていないと判断された場合は分類から外す。例えば『名詞＋ちゃった』の場合、名詞と『ちゃった』の間に動詞を模索しているような言い掛けが聞かれた場合は対象としない」と記している[(3)]。したがって、橋本（2006）の結果からは、L2幼児の「ちゃった」の使用傾向はうかがえるものの、「Ｖてしまう」構造全体の習得過程を詳細に知る事は難しいと思われる。以上の点を踏まえ、本稿では「Ｖてしまう」構造に関する全ての発話を対象に、習得の最初期からの使用状況を調査し、発話例をできるだけ記述することによって、同構造の習得過程の特徴を明らかにしたいと考える。

３．L1幼児による予備調査

３－１　データ収集方法

静岡県掛川市在住のL1女児Ｎの「Ｖてしまう」構造について、初期の使用状況を報告する。Ｎ児のデータ収集は生後から3歳頃まで、日常生活での会話や様子などを記録することによって行われた。本調査では2歳1ヶ月までのデータを使用した。調査項目は「Ｖてしまう（／Ｖでしまう）」「Ｖてしまった（／Ｖでしまった）」「Ｖちゃう（／Ｖじゃう）」「Ｖちゃった（／Ｖじゃった）」「Ｖちゃって（／Ｖじゃって）」などの形式を含む「Ｖてしまう」構造である。調査対象とした発話データには、自発的発話のほか、参考のため、他人の発

話を繰り返したと思われるものも含めた。便宜上、1ヶ月を1つの単位として扱った。

適格、不適格の判断基準に関して、対象児が幼児であることから、例えば発音上の不完全さ（例：「汚い」を「（き）たんない」と言う）や、構造内の動詞活用形の不完全さ（例：「置いちゃった」を「おっちゃった」と言う）等は本稿では不適格とはせず、不完全として扱った。時制の誤り（例：「Ｖちゃう」の場面で「Ｖちゃった」と言う）や、「ちゃう」の接続方法が不自然な場合（例：食べちゃっちゃった）などは不適格とした。

３－２　L1幼児の調査結果

Ｎ児の結果は表1の通りである。表中には形式別に使用回数を記した。表中の（　）付の数字は、他者の発話を繰り返したと思われる発話回数である。

同構造が初めて観察されたのは1歳9ヶ月の時であり、その形式は「Ｖちゃった」であった。この時期には繰返しが1回あったが、自発的発話（例：ぼろぼろ　なっちゃった）も4回観察された。「Ｖちゃった」は翌月以降も継続的に観察された[(4)]。1歳10ヶ月の時には本来「Ｖちゃう」を使うべき場面で「Ｖちゃった」を用いた例も観察された（表中では「*Ｖちゃった→Ｖちゃう」）。また、この時期、発音が未熟なためか「ちゃった」を「たった」と言った例も観察された[(5)]。

「Ｖちゃった」が初出した翌月（1歳10ヶ月）には「Ｖちゃう」が観察され始めた。「Ｖちゃう」はその後も継続的に観察されたが、1歳11ヶ月の時、本来「Ｖちゃった」を使うべき場面で「Ｖちゃう」を用いた例も観察された（表中では「*Ｖちゃう→Ｖちゃった」）。また、これらの形式の他、1歳11ヶ月の時に「Ｖちゃって」も観察された（例：おちちゃってもいいよ）。

表１　Ｎ児の「Ｖてしまう」構造の使用回数

形式＼年齢（～歳～ヶ月）	1：0	1：8	1：9	1：10	1：11	2：0	2：1
Ｖちゃった	－	－	4（1）	50	47	31	9
Ｖたった	－	－	－	3	－	－	－
*Ｖちゃう→ちゃった	－	－	－	－	1	－	－
Ｖちゃう	－	－	－	2	6	3	1
*Ｖちゃった→ちゃう	－	－	－	1	－	－	－
Ｖちゃって	－	－	－	－	3	－	－
各月計	0	0	4（1）	56	57	34	10

発話例をいくつか記す。分析対象とした「Ｖてしまう」構造には網掛けをした。（1）は「Ｖちゃった」「*Ｖちゃう→Ｖちゃった」の例、（2）は「Ｖたった」の例、（3）は「Ｖちゃう」「*Ｖちゃった→Ｖちゃう」の例である。例中の〈　〉は発話時の状況、［　］は発話内容、（　）は筆者が補った語、（→）は本来の表現である[(6)]。発話例最後の（　）内の数字は発話時の年齢（～歳～ヶ月）を示す。各項目における発話例は出現順に記した。

（1）「Ｖちゃった」「*Ｖちゃう→Ｖちゃった」の発話例
　ａ．〈救急車の音を聞いて〉ピーポー　いっちゃったよー。（1：9）
　ｂ．〈ぼろぼろのお菓子を見て〉ぼろぼろ（に）なっちゃったー。（1：9）
　ｃ．〈ファイルが落ちたのを見て〉おちちゃった、*おちちゃう（→おちちゃった）。（1：11）

（2）「Ｖたった」の発話例
　ａ．てってたんなかったー［手が汚くなった］、たんなかったったー［汚くなっちゃった］。（1：10）
　ｂ．なったったった［無くなっちゃった］。（1：10）

（3）「Ｖちゃう」「*Ｖちゃった→Ｖちゃう」の発話例
　ａ．〈手に持っている物が落ちそうな時〉おちちゃう。（1：10）
　ｂ．〈素麺が器から落ちかけている〉*おちちゃった（→おちちゃう）、おちちゃう。（1：10）
　ｃ．〈履いている靴を脱ぎながら〉ぬいじゃう。（1：11）

同構造では様々な動詞が用いられたが、特に「落ちる」「行く」が多く見られた。例えば、1歳10ヶ月では「落ちる」が16回、「行く」が7回用いられたのに対し、他の動詞（例：出る、死ぬ、取る、止まる、食べる）は1～4回であった。動詞のうち「出る」「死ぬ」「落ちる」などは、本来の意味とは異なる意味で用いられる場合もあった。「出る」は「止まる」、「死ぬ」は「落ちる」「破れる」「閉まる」「濡れる」、そして「落ちる」は「転ぶ」「倒れる」などの意味でも用いられていた。（4）はその発話例である。

（4）「出る」「死ぬ」「落ちる」が異なる意味で用いられた発話例
　ａ．〈水道の水が止まったのを見て〉でちゃった。（1：9）
　ｂ．〈鞄が落ちたのを見て〉しんじゃった。（1：10）
　ｃ．〈破れている服を見て〉しんじゃった[7]。（1：10）
　ｄ．〈立てかけてあるCDが倒れたのを見て〉おちちゃった。（1：10）

また、動詞に関して、自動詞と他動詞との混同や、発音あるいは活用形が不完全な発話も見られた。（5）（6）はその発話例である。不完全な発話には、（6b）（6c）のように「～くなっちゃった」を「～くっちゃった」「～かっちゃった」とする例が多く見られた（観察期間中に18例）。

（5）自動詞・他動詞が混同した発話例
　ａ．〈踏切の音が止まった時〉とまっちゃった、とめちゃった、ない。（1：11）
　ｂ．〈水が沢山出た時〉おっきいの　でちゃった、おっきいの　だしちゃった。（2：0）

（6）発音あるいは活用形が不完全な発話例

a．〈ペンのふたが取れた時〉といちゃった。（1：10）

b．〈電話が切れて声が聞こえなくなった時〉でなく（な）っちゃった。（1：11）

c．ねむかっちゃった、ねむくなっちゃった。（1：11）

d．びっくりっちゃった。（1：11）

3－3　L1幼児の習得の特徴

N児に見られた「Vてしまう」構造の習得過程の最初期に見られた主な特徴は、次のとおりである。

（7）N児に見られた主な特徴

a．縮約形（例：～ちゃう、～ちゃった）のみが観察され、「てしまう」「てしまった」を用いた例は一例も観察されなかった。

b．「Vてしまう」構造の初出は1歳9ヶ月の時であり、その形式は「Vちゃった」であった。その翌月に「Vちゃう」が、さらにその翌月に「Vちゃって」が観察された。

c．時制に関して、最初期には「Vちゃう」を「*Vちゃった」としたり、その後「Vちゃった」を「*Vちゃう」としたりする誤りが見られた。

d．構造内で用いられた動詞のうち、「落ちる」「行く」の使用回数が比較的多かった。

e．構造内の動詞に関して、ある動詞を別の意味で使用する、自動詞・他動詞を混同する、発音あるいは活用形が不完全である、などの不自然さが見られた。

4．L2幼児の調査

4－1　データ収集方法

調査対象としたのは、ブラジル人幼児2名（Y児，K児）である。彼らはブラジルで生まれ、その後両親と共に来日し、静岡県掛川市内の保育園に入園した。父親は片言の日本語しか話せず、母親は日本語が全く話せなかった。対象児達は入園前、日本人との接触がなく、家庭内やブラジル人の友達との会話は、全てL1であるポルトガル語を使用していたため、日本語が全く話せなかった。発話資料は、彼らの入園直後から12ヶ月間のものである。表1には彼らの来日年齢、入園時の年齢、そして観察時の年齢を示した。

表2　対象児の年齢

対象児	来日年齢	入園時の年齢	観察時の年齢
Y児	2歳0ヶ月	4歳7ヶ月	4歳7ヶ月－5歳6ヶ月
K児	0歳11ヶ月	3歳6ヶ月	3歳6ヶ月－4歳5ヶ月

観察は原則として1週間に1度、筆者が保育園を訪れ、1名につき約1時間の発話や状況等を記録し、テープ録音もした。観察時間帯には、自由遊び、合唱、遊戯、プール、先生

による絵本の朗読、先生の話、給食、おやつ、保護者の送迎等、様々な活動場面が含まれる。分析対象資料は、L1児同様、基本的に対象児の自発的発話としたが、参考として、繰り返しと思われるものも含めた。また、同時に同じ表現が繰り返された場合も回数に入れた。

４－２　L2幼児の調査結果

４－２－１　Ｙ児の結果

L2幼児の観察の結果、両児共に、縮約形を用いた発話が観察された。Ｙ児とＫ児の滞園月数ごとの発話回数を形式別に記したものが、それぞれ表3と表4である。

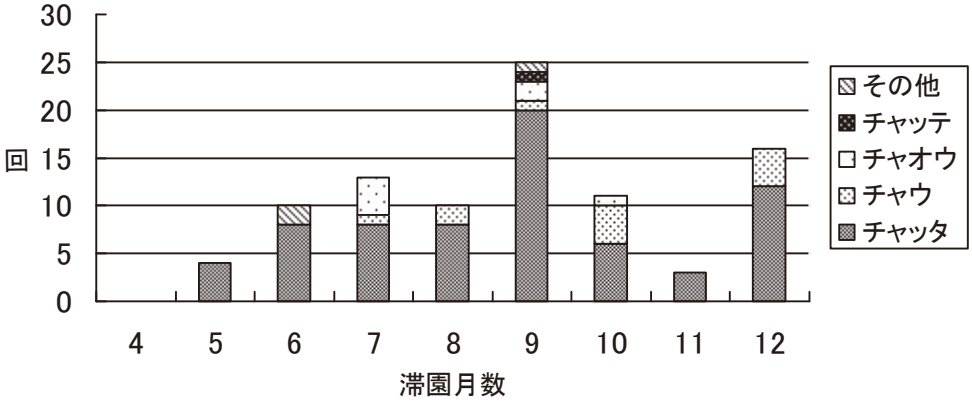
まず、Ｙ児の場合（表3）について見ていく。Ｙ児からは（保育園入園後）５ヵ月目に初めて「Ｖちゃった」が観察された。ただし、この時期の発話は限られたものであった。翌6ヶ月目には様々な動詞を用いた発話が観察されるようになり、さらに、本来「Ｖちゃう」を使用すべき状況で「*Ｖちゃった」を用いた発話も観察された（表中では「*Ｖちゃった→Ｖちゃう」)。その後、7ヶ月目になると、「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」が、9ヶ月目には「Ｖちゃって」が観察されるようになった。また、これらの形式の他に、発音が不完全な「Ｖたった」や、文法的誤りである「*Ｖちゃっちゃった」なども観察されていた[8]。

表３　Ｙ児の「Ｖてしまう」構造の発話回数

形式＼滞園月数	1	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Ｖちゃった	－	－	4	8	7	8	19	6	3	12
Ｖたった	－	－	－		1	－	1	－	－	－
*Ｖちゃっちゃった	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
*Ｖちゃった→ちゃう	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－
Ｖちゃう	－	－	－	－	1	2	1	4	－	4
Ｖちゃおう	－	－	－	－	3（1）	－	2	1	－	－
Ｖちゃって	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
月別　計	0	0	4	10	12（1）	10	25	11	3	16

これらの発話回数を「Ｖちゃった」(「Ｖたった」も含む)、「Ｖちゃう」、「Ｖちゃおう」、「Ｖちゃって」という形式別に、月ごとに示したものがグラフ１である。誤りの「*Ｖちゃっちゃった」「*Ｖちゃった→ちゃう」は「その他」に含めた。

グラフ１　Ｙ児の「Ｖてしまう」の形式別・月別発話回数



Ｙ児の発話例を記す。(8）は「Ｖちゃった」「*Ｖちゃっちゃった」の発話例である。「Ｖちゃった」が初めて観察された5ヶ月目の発話は、「どこ行っちゃった？」という表現をそのまま覚え、(8a)「こーちゃった」や（8b)「こいちゃった」のように言ったものであった[9]。その後、6ヶ月目以降になると、(8c)「いっちゃった」だけでなく、(8d)「しんじゃった」、(8e)「いれちゃった」など様々な動詞を用いた発話も観察されるようになった。

構造内の動詞に関しては、(8g)「おっちゃった」、(8j)「これちゃった」、(8l)「まちあえちゃった」のように発音あるいは活用形が不完全なものもいくつか見られた。また、(8h)（8k）のように「落ちる」を「こぼす」「転ぶ」などの意味として用いた例もあった。(8k）では、観察者（R）の「転んじゃった？」という質問に対し、「そう。*おちちゃっちゃった」と答えており、Ｙ児が「落ちる」を「転ぶ」の意味として用いていることが分かる。

(8）Ｙ児の「Ｖちゃった」「*Ｖちゃっちゃった」の発話例

ａ．わー、(ど）こー（いっ）ちゃった、かー（いっ）ちゃった。(5）
ｂ．〈蝉が飛んで行った時〉(ど）こい（っ）ちゃったー？　どこー？なーいー。(5）
ｃ．〈虫を見つけて〉虫（が）あるー。もう　いっちゃった。(6）
ｄ．〈死んだイモリを見て〉みて、しんじゃった。だれの（が）しんじゃったーこれ？(6）
ｅ．〈雑巾の中に雑巾を入れて〉よし、いれちゃった。(6）
ｆ．〈花の種を触りながら〉あー、おちちゃった。(6）
ｇ．〈鉄棒から落ちた時〉おっちゃったー。(7）
ｈ．〈友達が牛乳をこぼした時〉あー、おっちゃった。(7）
ｉ．〈紙が1枚なくなった時〉もういっこ　おてがみは？　どこいっちゃったー？（8）
ｊ．〈ペンがつかない〉これ　できない、あー、こ（わ）れちゃった。(8）
ｋ．〈R：(友達が）転んじゃった？〉そう。*おちちゃっちゃった、お水の（所で)。(9）
ｌ．〈友達の名前を書きながら〉まちあえちゃった、もういっかい。(10）

（9）は「Ｖたった」が観察された発話例である。（9a）では「おちたった」と「おちちゃった」を同時に発話している。また、（9b）では観察者の「どこいった？」の質問に答える形で「どこいったったかな」と発話している。これらが観察された時期はそれぞれ7ヶ月目、9ヶ月目であるが、それ以前の6ヶ月目には既に「いっちゃった」「おちちゃった」が観察されていた（上記8c、8f）。このことから、Ｙ児に見られた「Ｖたった」は、「ちゃった」を意図したものの、発音の未熟さ等の理由で「たった」になったものだと考えられる。

（9）Ｙ児の「Ｖたった」の発話例
ａ．〈椅子から飛び降りた後で〉おちたった、こうやって　おちちゃったー、いたい。（7）
ｂ．〈観察者：靴ない、靴どこいった？〉さーしらない。どこいったったかなー？（9）

（10）は「*Ｖちゃった→ちゃう」「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」の発話例である。（10a）「*ゆっちゃった」は本来「ゆっちゃう」とすべき例である。この例が観察された6ヶ月目の時点では、Ｙ児はまだ「Ｖちゃう」という形式が認識できておらず、そのため既知の「Ｖちゃった」を用いたのだろうと考えられる。「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」が観察され始めたのは翌7ヶ月目になってからであった。

（10）Ｙ児の「*Ｖちゃった→ちゃう」「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」の発話例
ａ．〈意地悪をする友達に対し〉*せんせい（に）ゆーっちゃった（→ゆっちゃう）。（6）
ｂ．〈遊具の上で〉おーちちゃう、たーすけてー。（7）
ｃ．〈邪魔するＫ君に対し〉だめじゃんか、せーんせい（に）ゆっちゃお。だめ、Ｋ。（7）
ｄ．〈折り紙で工作中〉えーとね、ここ　でっちゃうにー、こうやる。しってるもん。（12）
ｅ．〈筆者の持ち物を見て〉もらっちゃうよ。（12）

（11）は「Ｖちゃって」の発話例である。同形式は9ヶ月目に1度観察されただけである。

（11）Ｙ児の「Ｖちゃって」の発話例
〈ペンが落ちた時〉どこ　いっちゃった？あ　いた、とって。あそこーいっちゃって、とって。とれるよー。

４－２－２　Ｋ児の結果

次に、Ｋ児の場合（表4）について見てみる。Ｋ児からは、4ヵ月目に1度「Ｖちゃった」が観察されたが、翌5ヶ月目には何も観察されなかった。その後、6ヶ月目に再び「Ｖちゃった」が観察され、それ以降、継続的に見られるようになった。翌7ヶ月目には「Ｖちゃう」、11ヶ月目には「Ｖちゃおう」なども観察されるようになった。これらの他に、10ヶ月目に「*Ｖちゃ（って）ない」、12ヶ月目に「Ｖちゃってない」など、テ形を用いる形式も観察さ

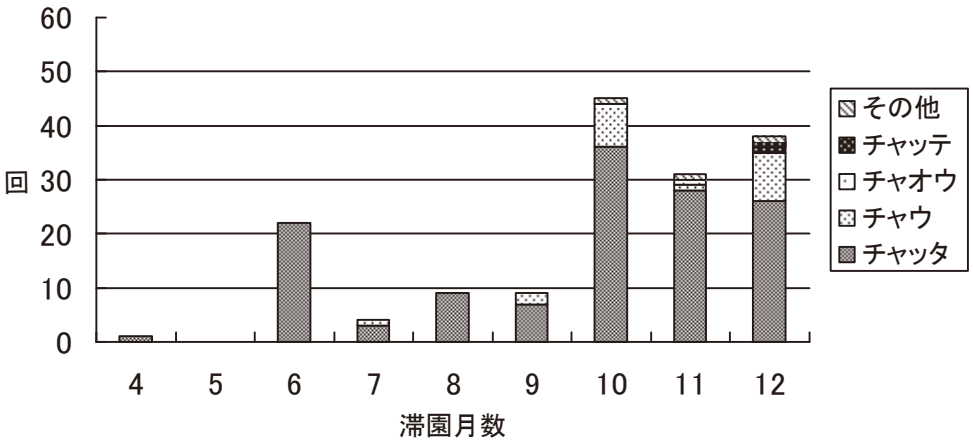
れた。また、11ヶ月目には「Ｖちゃった」が適切と思われる箇所で「*Ｖちゃう」を用いた誤りが（「*Ｖちゃう→ちゃった」）、12ヶ月目には「*Ｖちゃ（ったん）じゃない？」という誤りが観察された[10]。

表４　Ｋ児の「Ｖてしまう」構造の発話回数

形式＼滞園月数	1	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Ｖちゃった	－	1	－	20（2）	3	9	7	36	28	26
*Ｖちゃう→ちゃった	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
*Ｖちゃ(ったん)じゃない	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
Ｖちゃう	－	－	－	－	1	－	2	8	1	9
Ｖちゃおう	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
*Ｖちゃ（って）ない	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Ｖちゃってない	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
月別　計	0	1	0	20（2）	4	9	9	45	31	38

Ｋ児の発話回数を「Ｖちゃった」、「Ｖちゃう」、「Ｖちゃおう」、「Ｖちゃって」という形式別に、月ごとに示したものがグラフ２である。「*Ｖちゃう→ちゃった」「*Ｖちゃ（って）ない」「*Ｖちゃ（ったん）じゃない」の誤りは「その他」に含めた。

グラフ２　Ｋ児の「Ｖてしまう」の形式別・月別発話回数



Ｋ児の発話例を記す。（12）は「Ｖちゃった」「*Ｖちゃ（ったん）じゃない」の発話例である。（12a）は「Ｖちゃった」が初めて観察された時の発話「たべちゃった」である。そ

の後、6ヶ月目以降になると、「たべちゃった」だけでなく、「とれちゃった」「こぼしちゃった」など様々な動詞を用いた発話も観察されるようになった。

Ｙ児同様、Ｋ児にも、ある動詞を別の意味で用いた発話や、動詞が不完全な発話が観察された。例えば（12c）「取れる」は「割れる」の意味、（12m）「落ちる」は「倒れる」の意味、（12o）「こぼす」は「壊れる」の意味、（12p）「割れる」は「折れる」の意味として用いられている。また、（12j）「これっちゃった」、（12k）「おっちゃった」、（12n）「おーちゃった」は構造内の動詞が不完全な例であり、（12q）は「*～ちゃ（ったん）じゃない？」と接続を誤った例である。

（12）Ｋ児の「Ｖちゃった」「*Ｖちゃ（ったん）じゃない」の発話例

ａ．〈果物や牛のスタンプを押しながら独り言〉あ、たべちゃった。（4）
ｂ．〈砂遊びをしながら〉ごはんたべちゃったー。（6）
ｃ．〈おやつのクリームサンドが割れた時〉とれちゃった。（6）
ｄ．〈洗濯ばさみで挟んであったものが取れた時〉あ、とれちゃった。（6）
ｅ．〈水をこぼした時〉あー、こぼしちゃった。（6）
ｆ．〈お菓子が下に落ちた〉おちちゃった。（8）
ｇ．〈消しゴムを窓に貼り付けて跡がついた〉ついちゃったー。（9）
ｈ．おみず　のんじゃったー。（10）
ｉ．ほらー、こー（ん）なー（に）なっちゃった。（10）
ｊ．〈箸入れが閉まらない〉しめないじゃん、こ（わ）れっちゃった、ここに。（10）
ｋ．〈Ｒ：（そうやって便座に）ティッシュ置くんだ？〉そう、おっちゃった。できる？（11）
ｌ．〈観察者の靴を見て〉あ、ぬれちゃったのー？ぬれてる。（11）
ｍ．〈植木が倒れた〉おちちゃった。（11）
ｎ．〈傘が落ちた〉したー（に）おーちゃった。（11）
ｏ．〈パズルが人に当たり壊れた時〉ほらー、こぼしちゃったー。（12）
ｐ．〈シャーペンの芯が折れた時〉あれ、われちゃった。（12）
ｑ．〈ウインクしている顔の絵を見て〉
　もういっこ　おめめ（を描いてよ）。*まちがえちゃ（ったん）じゃなーい？（12）

（13）は「*Ｖちゃう→Ｖちゃった」の発話例「*こぼしちゃう（11ヶ月目）」である。この時、Ｋ児は落ちている物を見て「ちゃう」を使っていたが、本来なら「ちゃった」（あるいは「（ちゃっ）ている」）を使うのが適切だと思われる。この発話の直後には、床にあったシールを見て「シールはってる」と言っており、さらにＫ児は「ている」を含む表現を7ヶ月目以降よく使用していた（例：花火やってるじゃん、7ヶ月目。Ｍちゃんシールここに置いてる、8ヶ月目）。このことから、Ｋ児は「ている」表現は知っていたが、「Ｖてしまう」構造を用いた場合、どのように状態を表現すればよいのか分からなかったのではないかと考えられる。

（13）K児の「*Vちゃう→Vちゃった」の発話例
〈はんこが落ちている〉*これ　こぼしちゃう（→おちちゃった／おちている）。（11）

（14）は「Vちゃう」「Vちゃおう」の発話例である。同形式でも、（14h）「こ（わ）れちゃう」のように動詞が不完全な発話が観察された。また、12ヶ月目には（14g）「よこられちゃう［怒られちゃう］」のように受身形を使った表現も観察されていた。

（14）K児の「Vちゃう」「Vちゃおう」の発話例
a．〈R：（スープが）こぼれちゃったよ〉なーに？こぼれちゃう？（7）
b．〈友達の服のフードが頭から落ちそう〉おちちゃーう。（9）
c．〈糸にビーズを通すおもちゃの説明〉こーれーはー、そうゆうの　つくってー、そうゆうのー　おちちゃうんだに、おちちゃう。あれー、おちちゃった。（10）
d．せんせい（が）きちゃう。（10）
e．Yちゃんは　けんかして　してる。せんせいに　ゆっちゃおう。（11）
f．〈どくろを巻いた蛇の絵を描きながら〉へびさん　グルグルグル　なっちゃーう。（11）
g．〈遊具で遊びすぎると先生に怒られる〉よこられちゃう。（12）
h．〈スポンジの上に乗って〉あ、みてー、こー（わ）れちゃうー。（12）

（15）は「*Vちゃ（って）ない」「Vちゃってない」の発話例である。この形式は10ヶ月目以降に3例見られたが、いずれも観察者の「～ちゃった」という発話や質問を受け、K児がそれを否定するような形で発話されていた。（15a）の10ヶ月目の時点では、K児はテ形が言えず、「*～ちゃ（って）ない」と発話していた。しかし、その2ヶ月後には（15b）（15c）のようにテ形を用い、「～ちゃってない」と発話できていた。

（15）K児の「*Vちゃ（って）ない」「Vちゃってない」の発話例
a．〈R：終わっちゃった。〉*おわっちゃ（って）ない。おわってない。（10）
b．〈粘土でコップを作りながら〉（お茶が）こぼれちゃう。（中略）〈R：つぶれちゃった？〉こぼれちゃってない。（12）
c．〈R：落ちちゃったよ。〉おちちゃってない。（12）

4－2－3　L2幼児の「Vてしまう」構造習得の特徴

L2幼児の「Vてしまう」構造習得には、主に次の5つの特徴が観察された。まず1つ目は、縮約形のみが用いられ、「てしまう」「てしまった」を用いた発話は1度も観察されなかった点である。これは、彼らが自然な言語習得環境の中で周囲の会話を通して同構造を学んだためだと考えられる。

2つ目の特徴は、形式の初出順序について、まず「Vちゃった」が観察され、次に「Vちゃう」「Vちゃおう」が観察され、その後「Vちゃって」が観察されたという点である。各形式がまだ使えない時期には、Y児の場合「Vちゃう」の状況を「*Vちゃった」で表現

したり、K児の場合「Vちゃってない」を「*Vちゃ（って）ない」と表現したりする誤りも見られた。

3つ目の特徴は、「Vてしまう」構造内での動詞に関して、「落ちる」を用いた発話（例：おちちゃった、おちちゃう）が多かったという点である。Y児の場合、その発話回数は37回であり、他の動詞（例：「行く」20回、「言う」9回、「しぬ」7回）よりも多かった。K児の場合、最も多かった動詞は「食べる」（26回）であったが、次いで多かったのは「落ちる」（23回）、そして「なる」（22回）であった。

4つ目の特徴は、ある動詞が、異なる意味の場面でも幅広く用いられていたという点である。例えば「おちちゃった」は本来の「落ちちゃった」だけでなく「転んじゃった」「こぼしちゃった」「倒れちゃった」などの場面で、「とれちゃった」は「取れちゃった」だけでなく「割れちゃった」「取っちゃった」などの場面でも用いられていた。これは、彼らの知っている語彙が少なく限られており、類似した作用・変化を表現する際、既知の動詞を用いたためだろうと考えられる。

5つ目の特徴は、構造内の語彙や動詞に関して、発音あるいは活用形の不完全な発話がいくつか観察されたという点である。これは、彼らが明示的に語彙や動詞活用を学んでいないことに加え、動詞句（例：壊れちゃった）あるいは文（例：どこ行っちゃった？）をそのまま固まりとして覚え、使用したことなどによると考えられる。Y児に見られた「*おちちゃっちゃった」も、おそらくY児が「おちちゃった」を1つの固まりとして覚え、そこに「ちゃった」を付加したために生じた誤りだろうと予想される。

4－2－4　L1幼児との比較

L2幼児の結果をL1幼児の結果と比較した。表5は構造内で多用された動詞、および別の意味で用いられた動詞の比較である。L1幼児とL2幼児で共通して多用された動詞には、「落ちる」「行く」「なる」があった。おそらく、彼らにとって「落ちちゃった」「行っちゃった」などの状況は、具体的で認識が容易であったのだろうと考えられる。

彼らに共通して見られた、別の意味としても用いられた動詞には「落ちる」があった。「落ちる」の基本的な意味は「上から下へ物の位置が急に変わる」ことである（林1985）。そのため、一旦「落ちちゃった」が使えるようになると、類似した状況（例：倒れる、転ぶ、こぼす）においても、「落ちちゃった」を使って表現していたのだろうと考えられる。

表5　構造内の動詞に関するL1幼児との比較

対象児		多用した動詞	別の意味としても用いた動詞
L1　N児		落ちる、行く、なる	落ちる、出る、止まる、死ぬ、無くなる
L2	Y児	落ちる、行く	落ちる
	K児	食べる、落ちる、なる	落ちる、取れる、こぼす、こぼれる、割れる

表６は形式と出現順序の比較である。L1幼児、L2幼児に共通して「Ｖちゃった」→「Ｖちゃう」→「Ｖちゃって」という出現順序が見られた。「Ｖたった」はL1幼児とL2Y児には見られたがL2K児には見られなかった。また、「Ｖちゃおう」はL2幼児には見られたがL1幼児には見られなかった。

表６　使用形式の初出順序に関するL1幼児との比較

対象児		使用形式と出現順序
L1　N児		「Ｖちゃった」→「Ｖたった」「Ｖちゃう」→「Ｖちゃって」
L2	Y児	「Ｖちゃった」→「Ｖたった」「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」→「Ｖちゃって」
	K児	「Ｖちゃった」→「Ｖちゃう」→「Ｖちゃおう」→「Ｖちゃって」

表７は構造内の語彙や動詞が不完全な発話、および「ちゃう」の時制や接続方法を誤った発話に関する比較である。意味が分かるよう、漢字で記した。表中（　）内の数字は発話回数である。

不完全な発話は、L1幼児、L2幼児のいずれにも見られた。ただし、L1幼児の方が発話の種類が多く、そのほとんどは、本来、「～くなっちゃった」とすべき変化表現において見られたものであった。また、時制や接続の誤りでは、両者共に「ちゃう」を「*ちゃった」で表したり、逆に「ちゃった」を「*ちゃう」で表したりする誤りが見られた。しかし、L2幼児に見られた「*落ちちゃっちゃった」や「*～ちゃ（って）ない」「*～ちゃ（ったん）じゃない？」はL1幼児には見られなかった。

表７　不完全・誤りに関するL1幼児との比較

対象	構造内の語彙や動詞が不完全な発話	「ちゃう」の時制や接続の誤り
L1 N児	たんなく（な）っちゃった　［汚くなっちゃった］(4) たんなかったった　［汚くなっちゃった］(1) 無く（な）っちゃった（1）、　無ったったった（2） 眠く（な）っちゃった（1）、　眠かっちゃった（1） 赤（くな）っちゃった（1）、　ま暗かっちゃった（1） 出なく（な）っちゃった（1）、出なかっちゃった（1） いなく（な）っちゃった（1）、いなかっちゃった（1） つかなく（な）っちゃった（1） めーなく（な）っちゃった　［見えなくなっちゃった］(1) びっくりっちゃった（1） 取いちゃった（1） こんろーじゃった　［転んじゃった］(1)	*落ちちゃった（→ちゃう）(1) *落ちちゃう（→ちゃった）(1)
L2 Y児	（ど）こ行（っ）ちゃった？（1） （ど）こー（行っ）ちゃった？（2） どこ（行）っちゃった？（1） かーちゃった？［どこ行っちゃった？］(1) 落っちゃった（5）、　まちあえちゃった（1） こ（わ）れちゃった（4）、　痛くなーちゃった（1）	*ゆっちゃった（→ちゃう）(2) *落ちちゃっちゃった （→ちゃった）(1)
L2 K児	どこじじゃったー？　［どこ行っちゃった？］(1) こ（わ）れちゃった（1）、こ（わ）れっちゃった（1） こー（わ）れちゃう（1） 置っちゃった（1）、　落ー（ち）ちゃった（2） よこらーれちゃう　［怒られちゃう］(1) バラバラににちゃっちゃった［バラバラになっちゃった］(1)	*こぼしちゃう（→ちゃった）(1) *終わっちゃ（って）ない（1） *間違えちゃ（ったん）じゃない？ （1）

以上のように、L2幼児の「Ｖてしまう」構造習得の最初期には、L1幼児の習慣の特徴と類似した点が多く見られた。L1幼児に不完全な発話が多かった理由の１つとして、年齢が低かったことも考えられるが、詳細な分析については今後の課題としたい。

5　おわりに

ポルトガル語をL1とするL2幼児２名の発話データを基に、「Ｖてしまう」構造習得について調査した結果、主に次のような特徴が明らかとなった。

（16）L2幼児の「Ｖてしまう」構造習得の特徴

ａ．縮約形のみが用いられ、「てしまう」「てしまった」は1度も観察されなかった。

ｂ．観察された形式の初出順序は、「Ｖちゃった」→「Ｖちゃう」「Ｖちゃおう」→「Ｖ

ちゃって」であった。各形式がまだ使えない時期には「Ｖちゃう」を「*Ｖちゃった」で表現する、「Ｖちゃってない」を「*Ｖちゃ（って）ない」と表現するなどの誤りも見られた。

ｃ．「Ｖてしまう」構造内で比較的多く用いられた動詞は、Ｙ児の場合「落ちる」「行く」、Ｋ児の場合「食べる」「落ちる」「なる」であった。

ｄ．ある動詞が、異なる意味としても用いられていた。特に「落ちる」（例：おちちゃった）は「転ぶ」「倒れる」「こぼす」など様々な場面で観察された。

ｅ．構造内の語彙や動詞に関して、発音あるいは活用形が不完全な発話が観察された。

これらの特徴はL1幼児の特徴と類似しており、幼児の場合、L1かL2かにかかわらず、「Ｖてしまう」構造の習得過程は基本的に類似している可能性があると予想される。一方、先行研究の橋本（2006）で報告されている、動詞以外の語彙を用いる誤り（例：ボールちゃった、小さいちゃった、こうやってちゃった）、動詞の辞書形を用いる誤り（例：できるちゃった）、「ちゃった」のみを発話する誤りなどは本調査では観察されず、異なる結果となった(11)。

本稿で用いたL2幼児およびL1幼児のデータは、観察時期や観察場面が限定的ではあるが、「Ｖてしまう」構造の使用状況や習得過程を多少なりとも明らかにすることができたと思われる。L2幼児には、構造内の語彙や動詞に関する発音あるいは活用形の不完全さ、「ちゃう」の時制の誤りなど、不自然な発話もいくつか見られたものの、比較的早期から「Ｖちゃった」「Ｖちゃう」が数多く観察されていた。また、これらの表現はほとんど、「Ｖてしまう」構造を用いても不自然ではない然るべき状況や場面で使用されていた。このことから、彼らにとって同構造はそれほど習得困難な文法項目ではなかっただろうと予想される。今後、より多くの事例を重ね、「Ｖてしまう」構造の習得過程や、今回分析できなかった同構造の意味用法の使用状況などについても、より詳しく解明していきたいと考える。

注

（1）文法的に不適格な発話例には「*」を付した。

（2）橋本（2006）は「チャッタの段階的習得プロセス」として、「Stage 1：インプットから固まり抽出」「Stage 2：ピボット・スキーマの生成」「Stage 3：スキーマの修正」「Stage 4：TL（Target-Like）のみの産出」「Stage 5：高次のスキーマ修正」「Stage 6：TLのみの産出」という6つの段階を示している。橋本（2006）の注釈によれば、スキーマとは「経験に基づき抽象化、構造化され、鋳型・規範の状態に組み替えられた知識のあり方である（河上編1996、辻編2002）」、また、ピボット・スキーマとは「Throw X, X goneと1語をピボットとする構造スキーマのこと」である。

（3）一方で橋本（2006）は、「小さくしちゃった」を意図した「小さいーちゃった」は分析対象としており、この発話について「『小さい』の後音を延ばしており複合動詞を作ろうとしている」と説明している。つまり「動詞を模索しているような言い掛けが聞かれた場合」は分析対象外であるが、「複合動詞を作ろうとしている」場合は分析対象

ということになり、両者の違いが明確とは言い難い。また、一般的に「複合動詞」とは動詞が他の用言（普通は動詞）にじかに接し、両語が意味的に結合したもの（例：押し出す）である（森田1982）。しかし、橋本（2006）の言う「複合動詞」はこれに相当せず、同用語に関する説明もされていないようである。

（4）N児には1歳11ヶ月の時、食事後に「ごちちめちゃった」が観察されたが、意図した発話が明確でないため、本稿では分析対象外とした。当地域では「ご馳走様（でした）」の他に、大人が幼児に対し「ご馳走様する／した」という表現を用いることもある。

（5）「Vたった」は発音上、正確さに欠けるものの、本稿では適格構造とみなした。N児には1歳9ヶ月の時、「無くなった」を意図した「なったった」や、「手が汚い」を意図した「てってたんない」が観察された。その翌月には、「～ちゃった」「～たった」が付加された「なったったった」や「てって　たんなかった、たんなかったった」「てってたんなくっちゃった、てって　たんなくなった」「てって　たんなくなっちゃった」などが観察された。これらの発話から、「たった」が「ちゃった」を意図したものと判断した。先の例で「たんなかった」を過去形でなく「たんなくなった（tannak~~un~~atta）」と同義であると判断した理由は、「～くなる」を意図した場面で「ねむかっちゃった、ねむくなっちゃった（1：11）」「いなかっちゃった（1：11）」などの例が観察されていたためである。

（6）これらの記号はL2幼児の発話例でも同様に用いる。

（7）本稿では「Vている」（例：破れている）による表現が可能と思われる場面で「Vちゃった」を発話した場合も、適格構造として扱った。寺村（1984：127）は「～テイルはその現象が既に実現した、つまり終わってしまったが、その結果が物理的にあるいは心理的に、現在存在するということを表す」と述べている。また、工藤（1995：39－41）はパーフェクト性（後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存を表すもの）という表現を用い、「パーフェクト性のシタは、設定時点が発話時にある現在パーフェクトの意味となる。現在パーフェクトの『私の父はもう死んでいます』と『私の父はもう死にました』とは同義である」と述べている。これらのことから、「Vちゃった」が「Vている」を含意できると判断した。

（8）Y児には録音不明瞭あるいは意味不明のため分析対象外とした発話が3例あった。それらは「〈録音不明瞭〉…ちゃった（8ヶ月目）」、「〈ぶんぶく茶釜の話を説明〉あぶくちゃは　かわいいかわいい、おっちちゃったは　おかま　おちちゃは（中略）あぶくちゃは　おちちゃは　おかまいっぱい（10ヶ月目）」、「〈絵を描きながら〉はやくたすけてよー、あ、まちゃっちゃったー（12ヶ月目）」である。

（9）Y児は落ち着きがなく、勝手に他の部屋や庭などに行き、1人で隠れたり遊んだりすることが多かった。そのため、保育士達が「Y君、どこ行っちゃった？」と言いながらY児を探すことが頻繁にあり、Y児はそれをゲームのように楽しんでいた。

（10）K児には録音不明瞭あるいは意味不明のため分析対象外とした発話が2例あった。それらは「〈友達の箸が落ちた時。録音不明瞭〉あ、…ちゃった（7ヶ月目）」、「〈箸入れが閉まらない時〉これ、とっちちゃった、しめないじゃん（10ヶ月目）」である。

（11）橋本（2006）でもL2幼児に「Vたった」（例：作ったった、言ったった）という発

話が観察されているが、これらは「Ｖちゃった」としてではなく、「Ｖた」（例：作った、言った）を誤った例として分析されている。

参考文献

橋本ゆかり（2006）「幼児の第二言語としての動詞形の習得プロセス―スキーマ生成に基づく言語構造の発達―」『第二言語としての日本語の習得研究』第９号、23-41
林巨樹監修（1985）『現代国語例解辞典』小学館
石沢弘子・豊田宗周監修（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説英語版』スリーエーネットワーク
河上誓作編（1996）『認知言語学の基礎』研究社
小泉保・船城道雄・本田畠治・仁田義雄・塚本秀樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
森田良行（1982）「活用形の用法」小川芳男・林大他（編）『日本語教育事典』大修館書店、133
砂川有里子（代表）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』くろしお出版
友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2000）『どんなときどう使う日本語表現文型200』アルク
辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社
吉川武時（1982）「補助動詞類各説」小川芳男・林大他（編）『日本語教育事典』大修館書店、368

A Case Study of Acquiring the "Verb-*teshimau*" Structure by Brazilian Children

HISANO, Mitsuko

This paper is an investigation of the acquisition of the [V-*teshimau*] (*te* form of the verb + *shimau*) structure, which is basically used when the speaker wants to emphasize psychologically that he has finished something completely. Samples of spontaneous Japanese speech were longitudinally collected from two young Brazilian children.

The results show as follows: (a) The subjects used a colloquial style (*chau* / *chatta*) instead of a formal style (*teshimau* / *teshimatta*). (b) The subjects began to speak [V-*chatta*], a variety of the [V-*teshimau*] pattern, in the early stage of their acquisition, then they began to speak [V-*chau*] [V-*chaou*], and after that began to speak [V-*chatte*]. They made some mistakes such as using [V-*chatta*] instead of [V-*chau*], and using [V-*cha-nai*] instead of [V-*chatte-nai*] when they couldn't use a new appropriate pattern. (c) Expressions including the verbs *OCHIRU* (=fall, drop), *IKU* (=go), *TABERU* (=eat) and *NARU* (=become) were often observed (ex. *OCHI-chatta*). (d) Some expressions were used not only for an appropriate meaning but also for other meanings. In particular, *OCHI-chatta* was observed in various situations such as "tumbled down" and "spilt". (e) There were some unnatural expressions including incomplete conjugation or incomplete pronunciation of the verbs (ex. *OC-chatta* instead of *OCHI-chatta*).

Most of these features were also seen by a young Japanese child. On the other hand, we could not find mistakes such as using inadequate words instead of verbs (ex. adjective+ *chatta* , noun+ *chatta*), which is reported in the previous research.